



双塔

カトリック新潟教会

2019年3月
No. 370

二つの夜

協力司祭 鎌田 耕一郎

(ユダの夜) キリスト信者にとってユダの裏切りは、理解の出来ない神秘が含まれている。ユダはイエスに召された使徒の一人であった。彼は選ばれた者だったのである。ユダは会計係であった。通常この仕事は忠実な信頼に足る人に委ねられる。しかしユダは銀貨三十枚一奴隷一人の代価（出エジプト記 21・32）で主を売るのである。

普通、人はユダが財布の「中身をごまかしていた」（ヨハネ 12・6）盗人であり、貪欲がその原因であると考えられる。しかし銀貨三十枚は僅かの金額であり、主を売るよりは財布を持って姿をくらました方がよかったにちがいない。また後で金を返そうとして神殿に投げ込んだことを（マタイ 27・3-5）を考えると、この理由は単純すぎるのである。

ユダは自分の身の安全のためには、どんなことでもする臆病者だったのだろうか。ユダヤ人たちはイエスと行動を共にしたのも罰する気配があったにちがいない。復活の時まで使徒たちが、恐れ隠れていたことはそれを示している。ユダはその恐怖に耐えられなかったのだろうか。あるいはまた、地上の勝利を目的にイエスに従っていたユダの当て外れによる失望が原因だったかもしれない。

また、ユダはイエスの死をはかったのではなく、イエスが自己防衛のためユダが望んでいた行動を起こすように追い込んだのであり、裏切りの気持ちは持っていなかった。彼はやがて自分の愛する人を死に追いやったことに気づく。裏切り後のユダの不可解な行動がそれを裏書するという見方もある。

結局、如何なる心理分析もユダの心の秘密を解き明かすには足りないことを感じる。晩餐の席上からユダが去ったとき「時は夜だった」（ヨハネ 13・30）と記されている。ユダの心の中にも、底知れぬ夜の闇があったのである。

(ゲッセマニの夜) イエスが地上で迎えねばならなかった最後の夜は、痛ましいものであった。その夜、イエスは晩餐の部屋を去ってケドロン谷に下り、ゲッセマニの園にむかった。ゲッセマニは「油しぼり機」を意味し、オリーブ山の麓にあった。イエスはそこで医師ルカによる血の汗を流す「アゴニー(死苦)」（22・44）を味わうのである。

ゲッセマニの夜の神秘を最も感動的に綴ったものはパスカルであろう。その「イエスの秘儀」（パンセ 553）の中には、不滅の言葉を読むことができる。「イエスは世の終わりまで苦悶のうちにおられるであろう。この時のあいだ眠ってはならない」「イエスはこの苦痛とこの放棄を、夜の恐怖の中に耐え忍ばれる」「イエスは弟子たちの眠るあいだに、彼らの救いをほどこされた」「うれしいうちなるイエス」「主よ、私はあなたにすべてをささげる」—これはもはや描写や表現を超えた純粋な魂の祈りというべきであろう。

そこでイエスは三人の使徒たちに起きてるように望まれるほど深い孤独のなかに置かれた。そこで耐えるために全能を必要とした霊的苦悶を味わわれた。そしてそこで、み旨のままに苦しみの盃を受け取られるのである。